

バルザックの時代の一フラン

La valeur d'un franc du Temps balzacien

佐野 栄一

はじめに

バルザックの時代、一フランの価値はいったいどのくらいであったのだろうか。十九世紀のリアリズム小説、とりわけ『人間喜劇』を読む際、もし当時の一フランが現代のいくらくらいに当たるか見当がつかなければ、およそドラマは真の迫力に欠き、登場人物の心理にも十分感情移入できないだろう。『人間喜劇』では、しばしば金銭の問題がドラマの背景をなし、主要な細部を形成しているからである。この問題は、他の作家以上に、バルザックにおいては重要である。

一九九九年、あるバルザック研究者の論文の中で、バルザックの時代の一フランは現在のおよそ五百円に当たる、という記述を読んだ。この数字は、バルザック研究者なら誰知らぬ者のない著名なバルザック学の大家ロジェ・ピエロが、その著書の中で引用しているINSEE（フランス国立経済研究所）の統計による、一八四〇年の一フラン、イコール、一九九二年の二一・六九フランという額に、ユーロに移行する直前の円とフランの為替

相場の平均的交換率を掛けて割り出されたものであった。この算定は、最初にもととなる数字を提供しているのがフランス政府の専門機関であり、それに依拠して現代フランスに直したのがバルザック研究の大家であり、日本人研究者はそれを最も合理的な方法で執筆当時（一九九九年）の日本円に換算しただけなのであるから、容易に反論の許されない大変権威ある算定、ということになるう。

にもかかわらず、私はそれに疑義を呈したいと思う。

私事にわたるが、私は大学院に入ってバルザックを専門とするようになって以来二十数年間、一フランを約千円として『人間喜劇』を読んできた。そう考えてきた根拠は我事ながら定かでないが、おそらく大学や大学院で直接バルザック読解の指導を受けた三人のバルザックシアン（バルザック専門家）や、バルザック研究会などで会いする先生がたの、雑談のどこかで出てきた想定額を自然に受け入れたものではないかと思われる。ともあれ、学生時代、複数の先生が、だいたい千円くらいだと言ったことは記憶しており、それらはみな責任ある発言ではなかったにしろ、そうして与えられた数字で『人間喜劇』を細かく読むようになってからも、全体として、小説の解釈に不都合を感じることはなかった。それゆえ、先のバルザック研究者の論文冒頭で「五百円」という数字を見、その元になった記述を先の大家の著書で確認したときは、正直言って衝撃を受けた。真実は、これまで思ってきた額の半分だったのか、と、一瞬ひどく情けない気持ちになった。しかし、本当にそうなのだろうか。これまで大きな疑問が湧かなかつたのは案外それほど外的な額ではなかったからなのではあるまいか。単に手前勝手にそう思うのではなく、明確な数字の論理ではないにしろ、私には私なりの、それを自然に受け入れてきた私の読書経験に基づく潜在的論拠のようなものがあるはずである。それは、もしかすると間違っていないのではあるまいか。本論を書くきっかけはそこにあつた。そして、結論もまたそこにある。

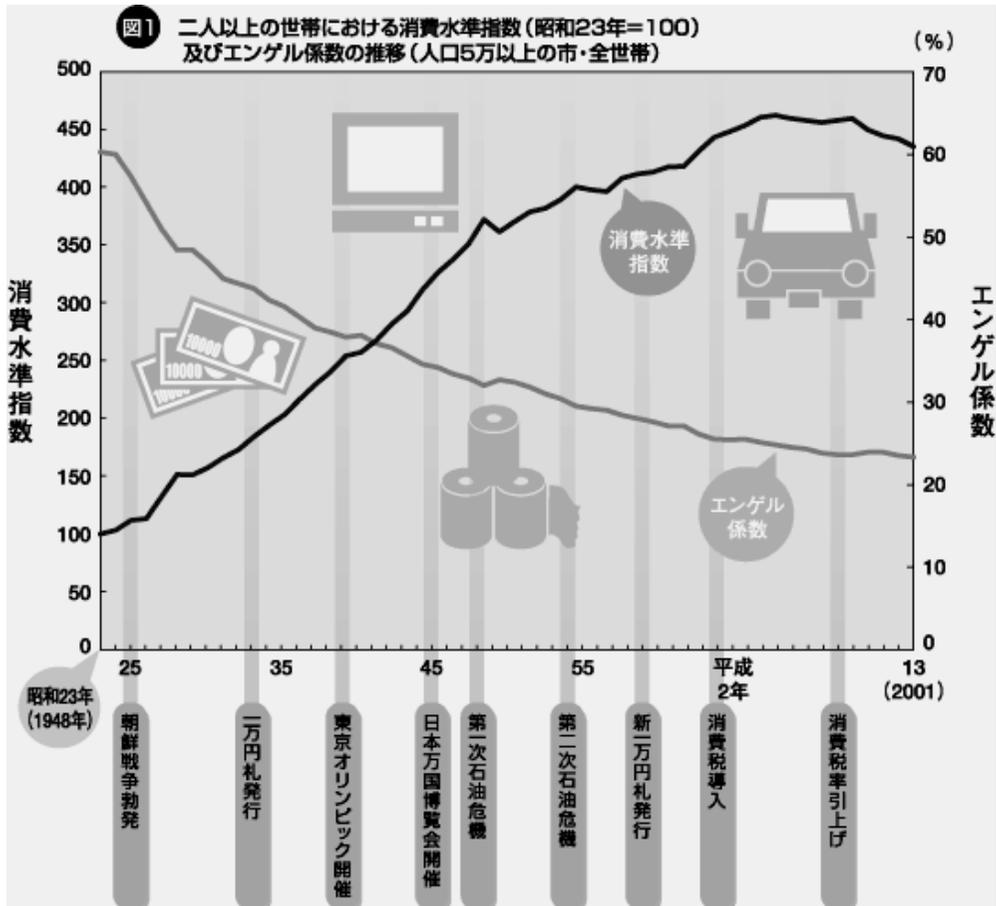
十九世紀における通貨価値の安定

バルザックの時代にインフレというものはなかったのである。たとえば、バルタザール・クラースが「絶対の探求」を始めた一八〇九年の一フランと、ユロ男爵が色欲の果てにアガト・ピクター嬢と再婚する一八四六年の一フランとは、三十七年を経て同じ価値を持っていたのであろうか。

われわれ日本人から見れば、これだけ時が経過すれば物の価値が大きく変動して当たり前である。厚生労働省の統計によれば、一九七六年の大卒初任給の平均は八万七千六百円で、二十五年後の二〇〇一年には十八万八千六百円（二、一五倍）になっている。家計支出についても、総務省の統計^三では、一九七六年東京都区部の親子丼一杯は平均四百円であったが、二〇〇一年には約八百円、コーヒー一杯は同二百円から四百二十円程になっている。ここでの大まかな例で見る限り、二十五年間に物価も所得も約二倍になり、その結果百円の価値は半減したわけである。

ところが、十九世紀のフランスにおいてはそうではなかった。フランスにおいては、十九世紀のみならず二十世紀初頭まで、通貨価値の変動はほとんどなかった。バルザックの時代の一フランの価値はおおむね同じであり、ゾラの時代にいたっても一フランの価値はバルザックの時代とだいたい同じだったのである。この事実については、これからゆっくり確認してゆくことにする。

もともと、一人の平均的フランス人にとって、一フランに対して感じる主観価値、具体的に言えば一フランをちよつとした金額と感ずるか、たいしたことない金額と感ずるかの度合いは、百年の間にある程度変化するであろう。日本を例にとれば、同じく総務省の統計で、一九四八年から二〇〇一年までの五十三年間に物価は十倍になったが、一世帯あたりの消費支出は三十五倍になった。戦後、エンゲル係数は一貫して下がり続け、消費全体



総務省の統計から

に占める教養娯楽費と交通通信費の割合がごく僅かずつであるが一貫して増え続けている。要するに、戦後、物価の上昇をはるかに上回って所得が増大し、生活水準が向上し、文化的になっていたのである。ということはおそらく、この間に、一個のごく普通の日本人の感覚では、百円の価値は十分の一以下に低くなっていくはずである。まったく逆の言い方をすれば、戦後まもなくの百円は、現在の千円よりもずっと重みを持っていたはずである。

フランスにおいても平均所得が増大すれば、同じことが言いうるだろう。しかし、十九世紀のフランスにおいては、その度合いははるかに少なかった。ピエール・ギラルの『資本主義黄金期のフランスの日常生活

活』によれば^四、一八四六年の平役人の平均給与は千三百フランで、五六年に千三百五十フランとなり、七三年には千四百フランとなっている。増えてはいるもののわずかである。一九世紀前半についてはどうか、いま私には『人間喜劇』以外に参照しうるものがないので、バルザックに頼ることになるが、一八一九年の物語『ゴリオ爺さん』の中で、平役人だった年金生活者ポワレが、在職中受け取っていた給与は千二百フランである^五。また、『人生の門出』において、リラダン行の乗合馬車の中で、セリジー伯爵本人がいるとも知らずその私生活を暴露して大失態を演じたオスカル・ユツソンの、義父である無能な平役人の俸給は、一八二二年頃千二百フランであつた^六。この数字をもとに五十年間の平役人の賃金上昇率を算出すれば、十六、七パーセントということになる。この間に、『老嬢』や『骨董室』で描かれているように、古い体質の貴族たちは没落し、新しいブルジョワの時代が到来している。また産業革命の進展によって労働者階級も誕生している。つまり、政治、経済、社会は、根底から大きな変貌を遂げているのである。にもかかわらず、五十年間の平役人の賃金上昇率が十六、七パーセントしかないということは驚異的なことのように思える。一年間の上昇率に単純平均すれば、〇、三パーセントとなり、おそらく、その時代に生きていた人間の生活感覚としては、生涯まったく変化を感じ取れないほどなのではなからうか。

次に、それより下層の庶民階級の収入はどうか。エドゥアール・ドレアンが『労働者運動の歴史』の中で引用している一八二五年のナントの医師ゲパンの記録によれば^七、定住所と家族を持つ比較的恵まれた印刷工、煉瓦石積工、大工、家具職人の年収は六百フランから千フランの間であつたという。当時の常態として、彼らは年間およそ三百日働くと考えられるから、これを一日あたりの賃金になおせば、二フランから三、三三フランということになる。また、この当時、最下級の単純労働者の日給は〇、七五フランから一フランであつたという^八。

これらの額と、次の「文人協会 Société des gens de Lettres」ホームページに掲載されていた賃金表を比較してみたいと思う。(別表)

別表

職 種	一八四六年の日給	一八六一年の日給
単純労働者 <i>manœuvre ordinaire</i>	一、五〇フラン	一、六〇フラン
熟練単純労働者 <i>manœuvre choisi</i>	一、八〇	一、八〇
土木作業員 <i>terrassier</i>	二	二、〇五
鉱夫 <i>mineur</i>	二、七〇	三、二〇
一級煉瓦石積工 <i>maçon de première classe</i>	三	三
二級煉瓦石積工 <i>maçon de seconde classe</i>	二、五〇	二、四〇
石切職人 <i>tailleur de pierre</i>	三、五〇	三、七五
舗石工 <i>paveur</i>	三	三、一五
左官 <i>plâtrier</i>	三	三、一五
屋根ふき職人 <i>couvreur</i>	二、五〇フラン	二、四〇フラン
縦挽き製材工 <i>scieur de long</i>	二、七五	二、五〇
大工、家具職人、鍵屋、車大工、鍛冶屋 <i>charpentier, menuisier, serrurier, charron, forgeron</i>	三	三、一〇
一級画家、ガラス職人、ブリキ職人、消防士 <i>peintre, vitrier, ferblantier, pompier de première classe</i>	三	三、一〇
二級画家、ガラス職人、ブリキ職人、消防士 <i>peintre, vitrier, ferblantier, pompier de seconde classe</i>	二、七〇	二、七〇

ドレアンの著書で示された数字とこの一覧の数字を容易に総括することはできないので、ただ明瞭なことのみに取り出せば、最下級労働者（単純労働者）の賃金は一八二五年から六一一年の間に一、六倍から二、一倍（〇、七五）一フランから一、六フラン）というかなりの上昇を示している。このことは、『マクミラン世界歴史統計・ヨーロッパ篇』に載っている工場労働者の賃金統計からも見ることがができる。同書の数値をグラフ化した別表を見れば、工場労働者の賃金は百年間で倍以上になっていることが分かる。しかし、大部分の職人ないしは職人的性格を持つ労働者の賃金は、大半の職種で微増傾向が認められるものの、職種によっては下がっているものもあり、概ね日給が二五年と同じ二フランから三、三三フラン程度の間にとまっている。このことを見れば、職人ないし職人的労働者については、三十六年前後も給与に大きな差はないと言いうる。ただ、労働時間は一八二五年頃は一般に一日十四、十五時間（昼食時三十分、夕食時一時間の休息が普通であったため、それを引けば実労働三時間程度）だったのに対し、文人協会の先の賃金表では十時間労働となっている。したがって、日給や月給は大差なくとも、時給単位では全体に上昇が認められることになる。

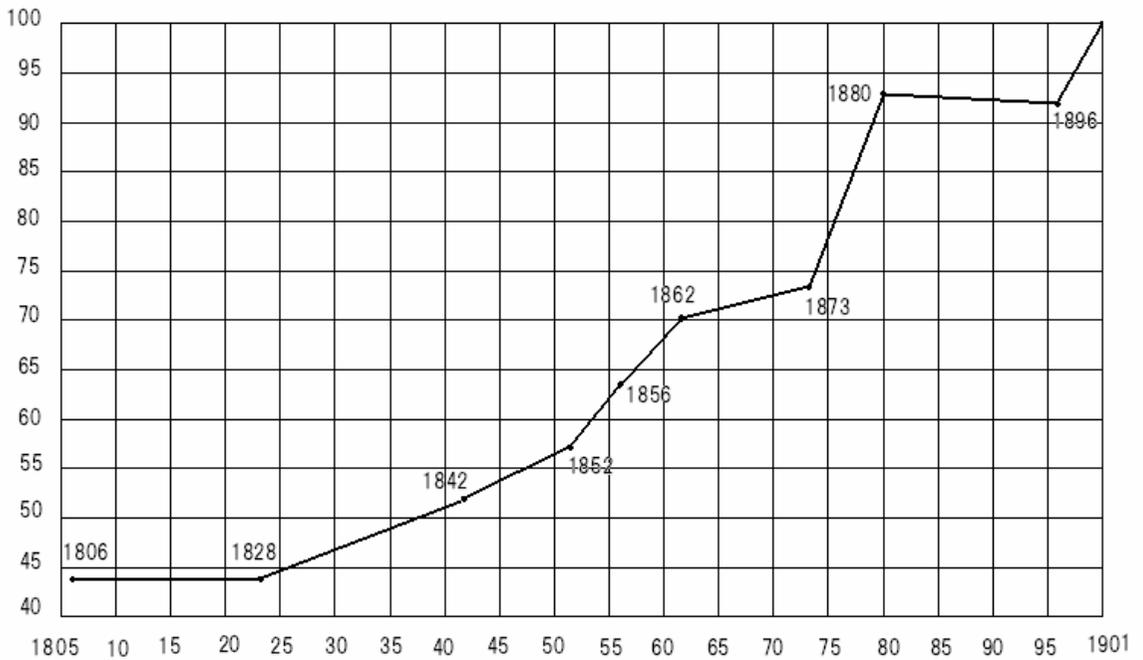
ただし、フランスでは、産業革命が進展し近代化が加速し始めた時期、職を求める人々の都市への流入が激しくなり、労働者の賃金が下降ないしは低迷している。ピエール・バルベリスによれば、「一八三六年から一八四八年の間に、男性労働者の平均賃金は、二フランから一、七八フランになり、女性労働者のほうは、一フランから〇、七七フランになった」^九という。ここには職種ごとの賃金の細目が示されていないので、単に三六年から約十年間の間に賃金がやや下降した事実だけを捉えれば、二五年の賃金と四六年から六一一年までの間の賃金がさほど変わりなかったのであるから、二五年から約十年間の間に賃金が若干上昇していたことになる。また、その上昇分に近い額が、三六年から約十年間の任意の時期にこんどは下降していたことになる。

別表

1901年の賃金を100とした場合のパリにおける工業労働者賃金変遷

(『マクミラン世界歴史統計・ヨーロッパ篇』1983年、p193の数字をもとにグラフ作成)

1806	44	1873	73
1828	44	1880	93
1842	52	1896	92
1852	57	1900	99
1856	63	1901	100
1862	70		



続いて、世紀後半に目を転ずると、労働者の賃金ははつきりと上昇傾向となる。一八七二年国民議会が行った正式調査によれば、五七年から七二年の間に労働者の賃金は二十パーセントから三十パーセント上がって、物価上昇率をはるかに凌いだ。この上昇傾向は、ギラールによれば、さらに七九年まで継続し、パリでは平均二十パーセントの上昇を見たという。

また、前掲書の統計から工場労働者の賃金は、五二年から六二年の十年間に十三パーセント、七三年から八〇年までの間に二十パーセント上昇し、世紀後半全体では、四三パーセントもの上昇を見ている。

ここまでのことから、全体を大まかに捉えれば、シャルル十世の復古王政三頃から七月王政初期までの間に、職人労働者の賃金も工場労働者の賃金も共にごくわずかに上昇したが、バルベリスによれば、別表に数値がない七月王政期半ば頃、一時下降した時期があつた。続いて、七月王政末期から第二帝政中頃までは工場労働者の賃金は若干上昇したが、職人労働者の賃金は横ばいである。しかし、その後は二十年間、少しずつだが顕著に上昇した、とすることができよう。さらに、全体を巨視的に眺めれば、先に引用した平役人の賃金が五十数年間に十六、六パーセント上昇していることと合わせて、少なくとも、一般フランス人の所得は、十九世紀の間に、大幅とはいえない程度、確実に増大している、としていいだろう。

一方、物価についてはどうか。『マクミラン世界歴史統計・ヨーロッパ篇』の卸売物価指数の欄から十九世紀フランスの部分を取り出し、一八四〇年から四四年までの間の物価を一〇〇として五年を単位に計算しなおしたものが、別表である。この表を見る限り、物価は、ナポレオンの時代から百日天下まではやや変動しているが、七月王政に入ってきたわけて安定し、第二帝政期に再びやや上下するものの、第三共和政以降は一貫して世紀末まで下落していることが分かる。世紀末は、いわばかなりのデフレ傾向を示しており、一八四〇年代に比べて、物価は三割以上も下落している。その主要な原因は、近代工業の発展によつて安価な量産品が市場に色々と出現し

別表

1840年～44年の卸売物価を100とした場合の19世紀の物価指数

(『マクミラン世界歴史統計・ヨーロッパ篇』の統計を基に作成)

1800～1804	84.8	1850～1854	98.1
1805～1809	106.9	1855～1859	115.1
1810～1814	122.6	1860～1864	111.5
1815～1819	92.9	1865～1869	103.2
1820～1824	111.2	1870～1874	108.2
1825～1829	105.6	1875～1879	98.2
1830～1834	99.1	1880～1884	88.0
1835～1839	102.4	1885～1889	75.4
1840～1844	100	1890～1894	74.2
1845～1849	95.4	1895～1899	67.2
		1900～1904	66.9



たことと、植民地の拡大によって、植民地農産物や植民地農産物を原料とするものが多く出回り始め、それまでの市場価格を下落させたためである。したがって、大幅に安くなったものは、現代日本の場合と同様、一部のものであるが、それが全体の物価指数を引き下げていると考えられる。おそらく、庶民感覚としては、昔高かったものが一部ずいぶん安くなってはいるが、生活のコスト自体はあまり変わらなない、少なくとも七十年代までは全然変わらなない、と感ずるのではなからうか。実際、手許にある資料から取り出すことのできる具体例では、五十年の隔たりを置いて、独身者の暮らしにおいてはほぼ同程度の生活出費を見ることが出来る。先のギラールの著書の中に、一八七〇年頃ブルターニュのレスヌヴァンに赴任したあるコレージュ教師の生活が載っているが、この教師は、赴任先で、非常においしい昼、夜の定食が月額三十フランで食べられることに大満足している^{一三}。さて、それより約五十年前の一八一九年、『ゴリオ爺さん』のヴォケー館では、ヴォケー夫人が「学生はパンを食べすぎると嘆きつつ、通い学生の夕、食の契約を、まったく同じ三十フランで結んでいる^{一四}。パリと地方の違いを考慮に入れるなら、バルザックの時代もゾラの時代も、物価に大きな較差は見られず、一フランの価値はあまり変わっていない、と見ることが出来る。ともあれ、数値の上でも、世紀末二十年間と百日天下までの時期を除けば、物価変動は十五パーセント程度の幅に収まっており、『人間喜劇』の主要作品の物語が展開する時代から『ルゴン・マツカール叢書』の時代まで、物価はきわめて安定していたと言うことができる^{一五}。また、一九〇〇年から一九〇四年の間の最も物価の安い時期と一八一〇年から一四年の間の最も物価の高い時期とを比較しても、この最低と最高の差は一、八三倍でしかない。十九世紀全体としては、大変安定していたといっていだろう。

ともあれ、統計で見える限り、フランス人の生活は、全体として、所得が増大し、物価が下がって、確実に豊かになっていく。しかし、資本主義の発展は、貧富の差の拡大も生じさせる。一握りの上層の人々が社会の富の大部分を独占するのが資本主義社会の常である。おそらく、ブルジョワにとっては、一フランの価値は一昔前より

はるかに低くなったはずである。だが、最下層の人々にとっては、所得がたとえ百年前と較べて二、五倍になつたとしても、動物のよつな劣悪な生活から^{一六}、大変貧しい生活程度へ改善されたにすぎない。また平役人を例に中層の人々の所得を見れば、先のように、はじめからかなり低い俸給で、それが少なくとも七三年までは二割も増大していかないのである。したがつて、たとえその後、工場労働者並みに二十七パーセントもの上昇があつたとしても、彼らにとつて、消費生活の広がりを考えれば、一フランの価値に大きな変化が生じた実感はなかつたのではあるまいか。総じて、十九世紀の一般フランス人においては、一世紀間を通じて、一フランの価値にほとんど変化はなかつた、と推定されるのである。

では、次に、なぜ、若干の物価変動はあつたものの、十九世紀全般にわたつて通貨価値が安定していられたのだろうか。それは、一八〇三年四月七日から一九一四年八月五日まで、フランスが金銀複本位制 *bimétallisme* をとり、その通貨体制を堅持していたからに他ならない。

通貨安定の理由

フランス革命期は、通貨にとつても、混乱と革新の時代であつた。革命政府は、革命戦争を戦い抜くために、アッシニヤ紙幣を乱発して貨幣経済を大混乱させたが、その混乱とは無縁に不変の価値を發揮し続けたアンシャンレژیムの貴金属貨の方も、二十進法や十二進法の複雑な単位構成を持つという大きな欠陥を有していた^{一七}。そのため、革命末期、通貨には二重の意味で、抜本的な改革が必要だったのである。

そこで、一七九五年テルミドル法 (Loi du 28 Thermidor An III) が發布され、この法によって登場することになったのが、十進法のフランであった。フランはこのとき、一フラン純銀四、五グラムと規定され、純度〇、九で五グラムの重さの一フラン銀貨が、翌年から鑄造された。新たに誕生したこの通貨フランは、まさに銀であった。それは、国家が強制する運用貨幣というより、銀そのものなのであり、銀貨の銀含有量が減らない限り、また市場の銀価格が暴落しない限り、絶大な信用力を持ちうるものなのである。ただ、このとき、この法にはもう一つの最も重要な貴金屬貨、金貨について、何も決定がなされず、アンシャンレジームのルイ金貨は、そのまま流通が認められていた。

フランによる新しい通貨制度を確固たるものにするためには、金貨についての基準も必要である、そう最終判断を下したのは、ナポレオンであった。一八〇三年四月七日、百年以上にわたってフランスに通貨の安定をもたらずジェルミナル法 (Loi du 17 Germinal An XI) が第一統領によって制定された。この法は、金と銀との価値の比率、つまり交換率を、ほぼ当時の金銀の市場取引価格に従って、一對十五、五と定め、一フランは純金〇、二九 (正確には〇、二九〇三二) グラムとされることになった。この基準に従って、同年より次の七種類の金貨、銀貨の鑄造が始められた。(次頁別表 参照)

これらの貨幣は、『人間喜劇』の主要な時期 (世紀前半) に関してだけ言えば、図柄を除いて何も変更することなく作られ続け、流通した。同じ純度、同じ重さ、同じ純金銀の含有量で、律儀に表のレリーフだけ、時の最高権力者が変わると直ちにその横顔に替えて造幣された。したがって、現在、七種類すべての貨幣について、ナポレオン、ルイ十八世、シャルル十世、ルイ・フィリップの横顔のものが残されている。(巻末別表)

金銀複本位制においては、カネはまさに金か銀であった。したがって、その信用力は絶大であるが、その反面、金と銀の保有量という物理的制限があった。世紀前半、概して貨幣は経済規模に比して不足気味であった。

別表

種類	純度	重さ	含有量
四分の一フラン銀貨（二五センチム、五スー）	〇、九	一、二五g	純銀一、一二五g
二分の一フラン銀貨（五〇センチム、一〇スー）	〇、九	二、五g	純銀二、二五g
一フラン銀貨	〇、九	五g	純銀四、五g
二フラン銀貨	〇、九	一〇g	純銀九g
五フラン銀貨	〇、九	二五g	純銀二二、五g
二〇フラン金貨	〇、九	六、五g	純金五、八五g
四〇フラン金貨	〇、九	一三g	純金一一、七g

また、もう一つ、金銀複本位制には障害があつた。それは、市場で金と銀との間にこれまで以上の価値の隔たりが生まれた場合、混乱が生じることであつた。事実、一八四八年カリフォルニアで、一八五一年オーストラリアで金鉱が発見され、大規模なゴールドラッシュが起こると、金の価格は徐々に下落を始め、相対的に銀の価値が上昇した。このため、フランス以外の国では銀の純度を落とす銀貨の改鑄が行われたが、フランスはジュエルミナルフラン体制を維持しようとした。その結果、フランスの銀貨は大量に国外に流出することになり、フランス国内では銀貨の不足と、それを造幣し流出させることによって生じる国家的損出が問題化し始めた。このため、

時の権力者ルイ・ナポレオンは、ベルギーとスイス、後にイタリアとギリシャを誘って、通貨の統一基準を作ることを提案し、一八六五年十二月二十三日「ラテン通貨同盟」と呼ばれる共通基準通貨体制を築くことに成功する。この同盟によって、フランスは、二フラン以下の銀貨の純度を〇、九から〇、八三五に落とすことを余儀なくされ、初めてジェルミナル法の通貨体制に一部変更が加えることになった。だが、その代償として、フランスの金銀複本位制は危機を脱し、その後逆に銀価格が下落するといったいくつか小さな波乱はあったものの、総じて、第一次世界大戦までフランは安定を続けることになるのである。

ところで、紙幣に関してはどうかであるのか。一七九六年に最初のフラン銀貨が鑄造されたのに続いて、一八〇〇年一月十八日フランス銀行が創設されると、すぐに二種類のフラン紙幣が発行されている。しかし、その額面は五百フランと千フランであり、おそらく庶民の中には、一度も紙幣を見たことがない者が相当数いたであろう。五百フラン、千フランという金額は、先に見たように、だいたい庶民の年収に相当する額であるから、そう簡単に紙幣を手にも目にもすることもできなくて当然なのである。実際、今回細かく読み直した『ゴリオ爺さん』では、五百フラン札は一度も出ず、千フラン札が四回出てくるが、それは特別な状況においてである^{一八}。まず初めて紙幣という名詞が現れるのは、ヴォートランが社会の不公平を告発するたとえ話の中である。物語上の現実ではないから、これはないものとして一回差し引いてもいいかもしれない。物語の中では、ラステイニヤックがデルフィーヌの金をルーレットに賭けて大勝ちし、その賞金七〇〇〇フランを手にするとき使われる。この七枚の千フラン紙幣はデルフィーヌに渡され、彼女はそこから一枚をラステイニヤックに与えるが、それが別の重要な場面で用いられることになって、三度目の千フラン札の登場となる。さらにもう一度、ゴリオが、アナスタジーの必要とする千フランを調達する中で出てくる。ゴリオは、娘のために、僅かに残された財産である思ひ出の銀食器を売り、アクセサリーの留め金を売り、さらに不足する分を年金証書を担保にゴブセックから借

金する。こうして、ようやく必要な金を工面するが、そのとき手にしたのが千フラン札である。このように、千フラン札が現れるのは、一般人にはおよそ縁のなさそうな状況である。賭博場にしろ、『ラビユーズ』のフィリップ・ブリードが賭けたり儲けたりするのは金貨銀貨であって紙幣ではない。紙幣は、貴族の特殊な世界が大ブルジョワの世界で流通しているものなのである。彼らにとつて、紙幣は大変スマートなものである。実際、もしラステイニヤックが、七千フランの賞金を金貨で受け取ったら、その重さは二キロ以上になる（二、二七五キロ）。貴族がエレガントに遊ぶには、当然重過ぎて不都合である。また、商人が多額の決済をする際にも、貨幣は不便である。紙幣は、当時、そういう用途でのみ使われた。フランスの百科事典ユニヴェルサリスの「フランス・フラン franc français」の項目によれば、一八一四年の通貨総額は二十億四百万フランで、そのうち紙幣が占める割合はわずか〇、二パーセントの四百万フランであった。それは千フラン札の枚数にして四万枚にしかない。この四万枚とは、一万円札なら四億円にしかない枚数である。当時、通貨の九九、八パーセントが貨幣だったのである。ただ、当然のことながら、経済規模が大きくなるに従つて、紙幣の割合は徐々に増大する。

『人間喜劇』にはもう語られることがないが一九、一八四七年には、通貨総額の五、六パーセント、預金を除けば、通貨総額の約六、二パーセントにあたる二億五千万フランが紙幣になっている。（このとき通貨総額は四十四億五千万フラン。）しかし、額面は変わっていないから、紙幣の役割はやはり一般人にとつては無に等しい。少なくともバルザックの時代は、文字通りカネは金銀かねだったのである。

余談になるが、フランスで紙幣が一般化するようになるのは、一八四八年以降のことである。フランスでは、実は、それまで紙幣はフランス銀行の独占ではなかった。紙幣は一般的な交換の中核に全然君臨しておらず、それは、いわば換金時期が自由な小切手のような存在であったから、もし銀行が発行に確たる責任を負うことができるならば、その銀行独自の紙幣の発行が認められていた。具体的には、発券総額と預金額とを合わせた額の三

分の一を常に金銀で準備することができれば、発券銀行になり得たのである。一八一七年から一八三八年の間に、フランスの各地で九行の発券銀行が創設されており、それらの発行紙幣総額は、フランス銀行券総額の四〇パーセントにまで及んでいた。この状態に終止符が打たれることになったのは、産業規模が拡大し、物資の流通が広く活発になるにつれて、様々な紙幣の存在が多くの弊害を生むようになってきたからにほかならない。第二共和制政府は、円滑な紙幣流通のために、一八四八年四月から五月の間に、これらの銀行を次々にフランス銀行と統合させ、発行紙幣を一本化することに決めた。こうしてフランス銀行が唯一の発券銀行となり、フランス銀行券が強制運用力のある法定通貨となった。フランス銀行は、紙幣の流通拡大を図るため、この改編と同時並行して百フラン札の発行（四八年）を開始し、七一年には五フラン札も発行した。その結果、世紀末の一八九五年には、フランスにおける紙幣の流通量は三十五億フランとなり、貨幣の流通量五十五億フランにだいぶ近づくようになった。世紀末、世紀中葉の銀行改編前（一八四七年）と較べれば、紙幣の占める割合は六倍以上に躍進したのである。しかしながら、それでもなお、二十世紀の初めまで、紙幣が貨幣の流通量を越えることはおろか、通貨総額の四割に届くこともなかった。十九世紀から二十世紀初頭までのフランス人にとって、カネは、やはり、まず第一に金銀であって、紙ではなかったのである。

一 フランは何円か

以上見てきたように、フランスでは、カネとはまさに金であり銀であったために、バルザックの時代ばかりでなく十九世紀全体を通して、通貨が安定を保ち、一フランの価値は世紀初頭も世紀末もさほど大きな隔たりがな

かった。では、この一フランは現在の日本円だといくらくらいと考えればいいのか。それを検討するために、ここでは『ゴリオ爺さん』に現れる主な金の記述を、一フラン五百円と千円の換算で示しながら、一覧表にしてみた。(巻末参照)

さて、これを見たからといって、一フランが何円くらいか簡単に決められようはずはない。ただ、それを五百円とすれば、いかにも少なすぎて、われわれの常識から相当外れてしまうことだけは確かである。平役人の月給が五万円で、パリで五人としない超一流弁護士が二千五百万円、貧乏貴族とはいえラスティニヤック家のウージェーヌを除いた両親、二人の弟、二人の妹と伯母の一家七人が、家計総支出月十万円以下で暮らしている、などということがあろうか。さらに、歴史的事実にも照らしておけば、一八三一年四月十九日、選挙法の改正が行われて、被選挙権が直接税千フランから半額の五百フランに引き下げられているが、それが年収どのくらいに相当するかといえば、山川出版『フランス史』第二巻によれば、二千五百から五千フラン(四八一頁)であるという^{二〇}。また、その数がどれくらいなのか、フランス国民議会Assemblée Nationaleのホームページによれば、七万人以下であったという。したがって、被選挙権を持っていた人間は、当時のフランス全人口(三、二五〇万人)の約〇、二パーセントということになり、もし一フラン五百円なら、後者をとつても一フラン五百円における年収二百五十万円以上の人は、千人に二人しかおらず、残り九十九、八パーセントの人はそれ以下の収入で暮らしを立てていたことになる。この数字は、当時の暮らしを想像する際、障害になっても、参考になることはないように思われる。二〇〇二年度における日本人の平均年収は四百四十七万八千円であるから^{二一}、一フランを千円とした額でも、なおかなり少なく、二十数年前から私は一フランを千円としてきたのであるから、この際、この二十年以上にわたる物価上昇率を加味して、一フラン二千円(つまり四倍)としたほうがいいかもしれないとさえ思う。実際、INSEEが現代との比較に選んだ一八四〇年において、物価は右の中段のとおりであるが^{二二}、

それを現代売られている一般的数量割合に直し、一フラン二千円で計算すれば、次のような数字になる。

品目	一八四〇年の値段	現代の標準量で、一フラン二千円とした場合の値段
赤ワイン	百リットル、十フラン	一本(七五〇ミリリットル)、百五十円
豚肉	三十キロ、三十フラン	百グラム、二百円
ジャガイモ	百キロ、八フラン	一キロ、百六十円
砂糖	一キロ、一、一フラン	一キロ、二千二百円
ブランドー	一リットル、一フラン	一本(七五〇ミリリットル)、千五百円
バター	五百グラム、一フラン	百グラム、四百円
柄付蓐	一本、〇、九五フラン	一本、千九百円
部屋靴(スリッパ)	二足、三、二五フラン	一足、三千二百五十円
インド製布地	一メートル、一、一フラン	一メートル、二千二百円
クルトン織(厚手フ リント布地)	一メートル、二、二五フラン	一メートル、四千五百円
ドアの掛け金	一個、一、一フラン	一個、二千二百円

こうして示した値段は、豚肉、ジャガイモ、ブランドーに関しては、おおむね近所の商店の値付けとさほど変わりないが、赤ワインは大変安く、バターはかなり高く、砂糖は、現代の基準からすれば異常に高いと言いうる^{二三}。また、現代では安価で豊富な工業製品の布地なども、やはりかなり高い。しかし、両極を除外して全体として見れば、少々高いかなと感じさせるものの現実離れした数字ではなく、高級住宅街のスーパーの無添加安全食品やプチ・ブランド品と思えば十分納得できる値段かもしれないのである。

さらに、この一八四〇年頃の一般労働者の賃金を見るために、ラルース社の『図版フランス史』第十一巻を参照してみると、この当時、特別な技能をもたない男性労働者の一日の賃金は、二フランから三フラン、女性労働者の賃金は一フラン以下、子供の賃金は約五十センチムであった。ついでに、そこに同じく記されているパンの値段も見ておけば、一リーヴル（五百グラム）十センチム（〇、一フラン）となっている^{二四}。これをさきほどと同様に一フラン二千円で計算すれば、男性労働者の日給四千円から六千円、女性労働者の日給二千円以下、小人労働者の日給千円、パンはバゲット一本（二五〇g）が百円、ということになる。労賃は一フラン二千円で計算しても、現代の基準からはまだまだ安く、パンは現在だいたいバゲット一本〇、七ユーロ、約九十五百四十円^{二五}であるから、ほぼ同じと言い得よう。

こうして見てくると、一フラン五百円という計算は、まったく説得力を持たない。勿論、当時は、多くのフランス人にとって、ちゃんと食べてゆくことが生きることであつたであろうし、物そのものが大変少なく、贅沢品と必需品との差もきわめて大きなものがあつたであろう。しかし、諸々の時代状況の違いを頭に置いて、当時の社会を想像する際、やはり一フラン五百円という計算では、小説のリアリティが損なわれてしまう。この額では、あちこちで「そんなことはないよ」という内心の声が、思わず知らず発せられてしまうのである。INSE Eが、誠実に算定を行ったことは微塵も疑われないが、その結果が妥当であるとは信じられない。私は、これがど

のような計算によって出されたのか、まったく見当がつかないが、現在金の国際取引価格が一グラム千五百円前後であり、これに当時の一フランは純金約〇、二九gという数値をかければ、五百円に近い四百三十五円という数字が得られる。それを見ると、あるいは算定の重要な要素に、まさにカネは金、という古い概念を持ち込んでいるのではないか、という疑いがふと頭をよぎる。

もとより、私はここで、改めて当時の一フランは今の何円くらいにあたると、決然と述べる意図もなければ、自信もない。しかし、大変影響力のあるINSSEEの数字は、信頼に足るものではない、ということだけは言い得ると思う。確かなことは、確かな数字などありえない、ということだけではあるまいか。

塩梅の論理

日銀は、そのホームページの中で、江戸時代中期の一両が現在のいくらくらいに当たるかについて、次のように述べている。

「米価を比較の基準においた場合、現在の約四万円、そばの代金を基準においた場合、十二万から十三万円、大工の労賃を基準においた場合、三十万から四十万円^{二六}」

これは、つまり、昔の金がいくらかは、何を比較の基準に取るかによってまったく違う、ということを意味している。たとえば、様々な要素を組み合わせるにしろ、現代と昔の貨幣価値を正確に比較するための材料の組み合わせ

わせなど、時代の変化を無視しない限りありえない、科学性のある算定などだ望み得ない、ということである。したがって、もしINSEEの他の研究員が、算定材料を別様に組み合わせて独自の判断を下したなら、同じ研究所が四倍の額を発表していた可能性もないとはいえない。賃金を比較の基準とすれば、実際、簡単に十倍にもなってしまうのである^{二七}。そういう性質のものなのである。

であるとすれば、われわれは、個々の読書経験、研究経験に基づいて、それぞれが自分の実感にあう額を、あるいは想像力のはばたきを妨げない額を、勝手に決めるしかない、ということになる。しかし、それではまったく個々別様で茫洋とし、一定の枠組みなどありえないではないか、といえ、そうでもないように思われる。私の知る限り、成熟した知性を持つ常識人の生活実感や経験値にはさほど大きな隔たりはなく、二十数年前直接耳にしたり、その後著書の中で読んだりした^{二八}専門家であると同時に生活人であった諸先生の、謂わばいい加減な数字は、みな、おおむね千円くらいと述べていたし、中年に至った自分にも、過ぎ去った時間の分だけ千円を若干大きくしてやれば、往時のその算定は、実になかなか塩梅が良かったと感じられる。少なくとも、私には、INSEEの数値より、諸先生のそのいい加減な、言い方を変えるなら、絶妙な値のほうが、はるかに信頼に足るように思われる。

もちろん、それもこれも、まったく科学性のない話であり、数値化のできない「いい加減」に価値を置かない人にとつては、いずれも愚昧な理屈であろう。だが、人間の生の感覚における限り、正しい論理とは、要するに、「いい加減」以外の何ものでもないのではなからうか。それは、実は、解明不能なほど複雑に大規模に構築されているにもかかわらず、いつしか自然と合点される平明な洗練性を持ち、きわめて柔軟で相対的で受容性に富む論理なのである。諸先生が念頭においていた一フラン千円という数字はそういう論理に裏打ちされていたにちがいない。また、それゆえにこそ、われわれは長くその上に安住することができたにちがいない。そう私には思

われるのである。

- 一 厚生労働省ホームページ、統計表データベースシステム労働統計要覧による
- 二 総務省統計局のホームページ、統計局家計調査による。
- 三 巻末別表 参照。
- 四 Pierre Guiral : *La vie quotidienne en France à l'age d'or du capitalisme 1852 ~ 1879*、邦訳、ピエール・ギラール著、尾崎和郎訳『フランス人の昼と夜』、誠文堂新光社、三十三頁。
- 五 Balzac : *Père Goriot, Pleiade t.3*, p.188
- 六 Balzac : *Un début dans la vie, Pleiade t.1*, p.761
- 七 Édouard Dolléans : *Histoire du mouvement ouvrier, tome 1, 1830-1871*, p.13-15
- 八 *ibid.*
- 九 Pierre Barbéris : *Balzac, une mythologie réaliste*, Larousse, p.193 河合昌亨、渡部隆司訳『バルザック、リアリズムの構造』二百五十九頁参照。
- 一〇 ピエール・ギラール前掲書、五十三頁。
- 一一 同書、同頁。
- 一二 一八二四年九月十六日から。
- 一三 同、百六十三頁。
- 一四 *op. cit.*, p.55
- 一五 さらに、時期をバルザックが小説家として活躍していた七月王政期に限れば、物価変動は、最大でもわずか三、三バ

ーセントである。二十年間、物価はほとんど同じであった、と云っていい。

一六 Edouard Dolléansの前掲書十二〜十三頁には、最下層労働者の生活が想像を絶するほど劣悪なものであった様子が、当時の医師の記述の引用から示されている。

一七 リーブルLivreは二十sou、一souは十二ドゥエDenier、あるいは四リアルHard、リアルは三ドゥエであった。

一八 op. cit., p.145, 176, 198, 259. なお、『ゴリオ爺さん』には、五百フラン札は一度も出てこない。

一九 『人間喜劇』では、一八四六年が最も後の登場年である。

二〇 百科事典ユニベルサリスによれば、当時の直接税は、一、土地と建物の収益に課税される税、二、賃貸収入に課税される税、三、商人、実業家、自由業者（医師、弁護士など）の営業収入総額から計算される税、四、戸口、窓税である。税収全体に対する直接税の割合は大きくなく、世紀末には二十パーセントに過ぎなくなっている。当時の被選挙権者の多くは、相変わらず大土地所有の貴族であったが、彼らのほとんどは年金を持っていた。ブルジョワの多くも、『人間喜劇』を読む限り、財産ができれば年利五パーセント（当時の通常金利）の国債を買った。したがって、年金から得る収入を加えると、実収入はもつとずっと多いと推測される。

二一 国税庁ホームページ、統計情報、「一年を通じて勤務した給与所得者」の第六表「給与総額及び平均給与」による。

二二 文人協会のホームページによる。数量がばらばらであるのは、ある一家の支払伝票をそのまま写したものだからである。

二三 砂糖は、七月王政末期には、甜菜の生産量が七倍に上昇して価格が下がり、このような贅沢品ではなくなる。前掲書『フランス史』参照。

二四 Larousse, Histoire de France illustrée, tome XI, Restauration et Révolutions 1815/1851, p.107

二五 一ユーロ、百三十六円二十七銭という二〇〇四年二月二十七日現在の相場で計算。

二六 日本銀行金融研究所貨幣博物館ホームページ参照。

二七 労働者の賃金を算定基準 s にすれば、実際十倍以上になる。

二八 鹿島茂氏は、『馬車が買いたい』（白水社、一九九〇年）十四頁において、一フランを千円と記している。また、同氏は様々な著作において、この計算で注を記している。（例えば『明日は舞踏会』、『レ・ミゼラブル』百六景』など）